

情報科の教育実習簿を SNS で作成・公開することで得た知見

大阪学院大学高等学校 松本宗久

本校では2011年からの3年間、教育実習において Social Network Service の一つである Facebook を利用してグループを作り、教育実習簿を限定公開した。従来教育実習生は、実習期間中実習校の指導教員のみでの指導になりがちであったが、この試みにより大学の指導教官や他校の教員などから指導を受けることが可能になった。この取り組みと、従来型の実習とを比較することで、どのような違いが生じたかについて報告する。

1. はじめに

情報科は2003年に新教科として設置された始まって10年目の教科である。また、必要な修得単位数の関係で各校に配置される人数もそれほど多くなく、若い教員も多い。そのため勤務して数年の教員が教育実習生の指導をするなど、従来になかった課題が生じている。

これまでも西端の調査¹⁾などにみられるように、大学側の観点から、指導教員が、教育実習に赴く学生に対し、SNSを活用した事例が報告されてきた。私は実習生を受け持つ高校側の指導教員の観点から、教育実習簿の記録にSNSを活用することを考えた。結果、3年間の実習において、実習生・指導教員双方にメリットがあることが分かった。今回の実践で得た知見について解説する。

2. 教育実習について

2.1 期間

実際の実習期間は2011年(平成23年)～2013年(平成25年)の6月上旬であり、SNSでの議論については、それを挟んだおおよそ前後1ヶ月間にわたった。

2.2 教育実習生及び指導教員

実習生：① 国立大学修士課程2年生(大阪学院大学卒業) ② 大阪の私立大学4年生(本校卒業生) ③ 大阪学院大学4年生

指導教員：1・2年目は松本(著者)が全体指導及び学級指導を、陶山祐子先生が教科指導を担当した。3年目は横山成彦先生が教科指導を、陶山先生が学級指導を行った。

また、本校において国語科の教員が、本実践にご賛同くださり、2年目の時期に同様の形で実習生一名を指導して下さったことを付記する。

2.3 使用したSNS

今回は Facebook を採用した。1年目の実習生がこのサービスに通じていたこと、決まったメンバーのみで情報が共有できること、実名参加が原則なので誰が発言しているのかわかること、動画や写真をアップ可能であることが主な理由である。

2.4 グループ参加者

今回は、実験的な要素もあり、筆者自身が旧知の関係にある方にしぼって参加していただいた。その後、後述するように期間中に参加者が増加していった。

2.5 実習簿の投稿について

投稿された基本のテキストは、教育実習簿1日分を単位として12日分である。

動画や写真については、指導教員がまず試験的に投稿し、実習生が残りを作成・投稿した。また、指導案や、それに指導教員がコメントを手書きしたプリントも画像化して投稿し、閲覧できるようにした。その際、陶山先生は手書きでコメントを書く場合は、注意点と良い点を色分けし、実習が進むにつれて、良い点が増えていく様子を可視化するという工夫を示してくださった。

3. 気づいた点

3.1 メリット

実習生と指導教員が、実習校外のメンバーの知見も得ることができる。(大学での指導担当者等が、メンバーとして参加することで、実習期間中にも実習生の指導を行える。)このため、実習担当教員も、自分一人で実習生を指導するのではなく、皆で実習生を指導しているという安心感と、より深く学ぶ機会の両方を得ることができた、と考えている。また年度によっては他校の教員から、自分の実習生にも内容を見せたい、との要望があり、閲覧を許可したこともある。

教育実習の記録として、動画や画像、資料のデータを入れることができる。

参加メンバーで、教育実習の成果を共有することができる。

本校で実習を行う学生が、過去の事例を確認できる。(当初より実践を重ねて、実習簿のアーカイブを作成することを念頭において実践を行った。)特に3年目は実習生が、本校の卒業生ではなかったため、学校の様子をわかってもらうためにも有意義であったと思われる。

3.2 デメリット

利用する SNS によって、参加者や、実習簿の内容にある程度制限を受ける。そのため、よく吟味して SNS を選択しないとイケない。ただし、3年間の実践を終え、セキュリティを気にして自前でシステムを持つのではない限り Facebook で十分ではないかと考えている。

実習生、指導教員ともに、文章欄に制限がないので、文書が長くなりがちで、画像や動画作成も行うため、紙媒体の実習簿と比較し、実習簿作成にかかる時間が長くなってしまふことが多い。

動画の作成、写真撮影、プリントのスキヤニングなどができる知識と環境が、教員・実習生双方に必要である。

オンライン上の指導は、ある程度見知った関係でないとうりにくい場合がある。

4. 実践を行って気づいた点

参加メンバーは、高校教員だけでなく、大学教員や教科書会社の編集者など多彩であり、私語に対する指導に関して、過去の論文が参考文献として投稿されたり、アップロードした動画への意見として、「声が出ている、離れているからこそ見えることもある」等、色々な観点から意見をいただくことができ、指導教員のみならず、メンバー全員が見識を深めることができた。

実習生・指導教員が熱意を持って実習にあたっていることが伝わると、メンバーからの反応もよかった。一方で、常に他人の眼があることを意識せざるをえないことが実習生や教員にプレッシャーを与えることにもなった。(一度、実習生より、自分の実習のためでなく、外部とのやり取りのために実習簿を作成しているような気がするという指摘を受けたことがあり、バランスのとり方について気をつけようと感じた)

実習生の観察で足りない点を教員が補足説明したり、グループに参加しているメンバーにわかってもらえるよう、双方ともに咀嚼して書いていくように努めた。例えば、実習簿の記入について、「1時間目」なのか「1限目」なのかといった、語句の取り扱いなどに注意した。

1・2年目は実習生・指導教員双方の時間の許す限りにおいては、一度印刷した実習簿をもとに討議してから実習簿をアップする形をとった。しかし3年目は実習生の大学での指導教員が積極的に関与下さり「指導簿は最後に紙ベースでまとめるのだから、途中の過程でもいいので早くアップしてほしい」との意見をいただいたのでやりかたを変更した。このようにオンラインとオフラインのバランスのとりかたは臨機応変に対応してい

なければならぬ難しさを感じることもあった。

5. 今後の実践に向けて

今後も実践を継続・検証し続けることが、何より大切であると考えている。3年間を経てアーカイブ化への道筋ができるなど徐々に成果もあらわれてきた。こうした点を踏まえた上で、今後実践すべき課題として以下のようなことを検討している。

指導案や実習簿について、使用する語句の統一、説明の仕方など、標準的な仕様を作り上げる。

公開授業は動画をストーリーミング配信し、Twitter 等で外部から評価してもらう。

来年度に教育実習を担当する予定の学生に、過去の実習簿を見てもらい、本校での実習をスムーズに行えるような仕組みづくりについて今後も改善していく。

6. まとめ

今回の実践は、実習生の努力や、大学の指導教官の理解もあって、実現することができた。3年目に当該年度のメンバー参加を募ったところ、読んでいるよと励ましてくださる方もおり、今回の実践は充分意義があったと考えている。

今後も本校を含め、高大で連携して実践を積み重ね、互いに情報を共有できるようになれば、教育実習の成果が底上げできるようになると期待している。私も今後共努力していく所存である。

7. 謝辞

3年間実践に協力してくれた、3名の教育実習生および、教科・学級指導をともに行ってくださった陶山祐子先生、横山成彦先生、そして SNS に参加して下さったメンバーの方々に大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。また今回の実習簿を見たいと思われる方は Facebook にて筆者へリクエストをいただければ、グループに招待させていただきます。遠慮無くご連絡下さい。

参考文献

- (1) 西端律子：SNS を活用した協調的な教育実習指導、情報コミュニケーション学会誌, Vol.6 No.1, pp.4-12(2010)
- (2) 松本宗久：SNS を活用した教育実習の実践について、日本教育情報学会、年会論文集 (27), 306-307 (2011)